

EXCAVATION REPORT  
ON  
THE ARCHAEOLOGICAL  
SITE  
OF HEIANKYOU • DOUNOKUCHICYOU

2019

KOKUSAI BUNKAZAI CO., LTD

平安京右京七条一坊四町跡・

堂ノ口町遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

国際文化財株式会社

平安京右京七条一坊四町跡・堂ノ口町遺跡  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

国際文化財株式会社

平安京右京七条一坊四町跡・

堂ノ口町遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

国際文化財株式会社



# 例 言

1. 本書は、京都市下京区朱雀正会町 1-30、朱雀堂ノ口町 20-4 における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、スターツコーポレーション株式会社の計画する複合施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）第 92 条の規定により 2018 年 9 月 3 日付で京都府教育庁指導部文化財保護課に届出をし、0 教文第 5 号の 55 で許可を受け、文文財 732 号（受付番号 18H102）の通知にて実施したものである。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに国際文化財株式会社が実施した。
4. 発掘調査の面積は、78.85㎡である。
5. 発掘調査は、2018 年 9 月 10 日～2018 年 9 月 27 日まで実施した。  
整理作業は、2018 年 10 月 1 日～2018 年 12 月 28 日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。  
国際文化財株式会社  
西日本支店長 森下 賢司  
主任調査員 河野 凡洋  
調査補助員 小林 郁也
7. 発掘調査及び整理作業は河野が担当した。
8. 遺構、遺物の写真撮影及び本書の執筆、編集は河野が行った。
9. 遺構図に使用した座標、水準測量は、テクノ・システム株式会社が行った。
10. 調査図面、写真などの記録類及び出土遺物は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で保管される。
11. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略）  
家崎 孝治、馬瀬 智光、島津 功、山田 邦和、吉川 義彦（五十音順）  
京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、  
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、スターツコーポレーション株式会社、株式会社アート、  
テクノ・システム株式会社、一般社団法人歴史文化研究所

# 凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系VI系に基づいており、方位は座標北を北として表記した。  
水準点はT.P.値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を50・100・200分の1とした。
4. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、各章末に註として掲載した。
7. 遺構の分類は、下記の呼称を用いた。  
掘立柱建物跡、礎石建物跡、柵列、溝、土坑、柱穴、礎石、園池、堀、流路。
8. 遺物は全てに通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の精細な事項については、古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992、古代の土器研究会編『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』1993、古代の土器研究会編『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』1994、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀 -』京都編集工房2005にしたがった。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と歴史的環境	6
第3章 遺構	8
第1節 基本層序	8
第2節 遺構	8
1. 第三面目の遺構	8
2. 第二面目の遺構	8
3. 第一面目の遺構	11
第4章 遺物	15
第1節 遺物の概要	15
第2節 出土遺物	15
第5章 総括	20

# 挿図目次

図1 調査地位置図1 (1:500,000)	1
図2 平安京条坊復元図における調査地位置図 (1:40,000)	2
図3 調査地位置図2 (1:5,000)	3
図4 調査区作業風景(東から)	4
図5 調査区作業風景(北から)	4
図6 計画範囲と試掘・調査区配置図 (1:500)	5
図7 周辺調査地位置図 (1:2,500)	7
図8 南壁土層断面図、西壁土層断面図 (1:50)	9
図9 溝1、流路11土層断面図 (1:50)	10
図10 1. 第三面目遺構平面図 (1:50)	12
図11 2. 第二面目遺構平面図 (1:50)	13
図12 3. 第一面目遺構平面図 (1:50)	14
図13 出土遺物1 (1:4)	17
図14 出土遺物2 (土器、瓦1:4、釘1:2、銭貨1:1)	18
図15 出土遺物3 (1:4)	19
図16 調査区遺構変遷図 (1:150)	21
図17 調査区溝1と1982年発掘調査SD765の位置関係 (1:200)	22

## 表目次

表 1	周辺調査地の概要	7
表 2	南壁土層断面図、西壁土層断面図注記	10
表 3	出土遺物概要表	15
表 4	遺物観察表 1	23
表 5	遺物観察表 2	24

## 図版目次

図版 1	遺構	1	第一面目全景（北から）
		2	第二面目全景（北から）
図版 2	遺構	1	第三面目全景（北から）
		2	第三面目遠景（北から）
図版 3	遺物		出土遺物 1
図版 4	遺物		出土遺物 2
図版 5	遺物		出土遺物 3

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、京都市下京区朱雀正会町1-30、朱雀堂ノ口町20-4（図2・3）にて京都市により中央卸売市場第一市場の施設整備計画において七条通りに面した中央卸売市場第一市場水産事務所跡地を「賑わいゾーン」として活用する事業が計画され、その活用事業としてスターツコーポレーション株式会社によって複合施設の建設計画が発端となる。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」、「堂ノ口町遺跡」に該当する。

2018年5月30日にスターツコーポレーション株式会社によって複合施設建設に伴う届出が提出された。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化



図1 調査地位置図1 (1:500,000)

財保護課（以下、「京都市文化財保護課」という）は当該地の試掘調査を2018年7月9日に実施した。試掘の結果、埋蔵文化財が確認されたことから、スターツコーポレーション株式会社と京都市文化財保護課との間で調査の協議がもたれた。発掘調査は京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化財保護課の指導を受け、スターツコーポレーション株式会社より委託を受けた国際文化財株式会社が行った。現地調査期間は2018年9月10日～2018年9月27日まで実施した。発掘調査の結果、鎌倉時代から室町時代の溝、近世の土坑などを検出した。

## 第2節 調査の経過

今回の調査の体制と方法を定めるために、周辺の調査の成果や今日までの研究について精査し、検証を行った。当調査地を含む右京七条一坊四町は北側の三町と合わせて2町分に平安時代には外交使節を饗応する施設である西鴻臚館が設置されていたようである。その内、右京七条一坊四町においては1982年、2017年の京都市中央卸売市場施設整備工事時に財団法人京都市埋蔵文化財研究所（現在は公益財団法人）によって発掘調査が実施されている<sup>(註1)</sup>。1982年の調査地は当調査地の北側に位置し、平安時代から室町時代の柱穴、土坑、溝、井戸などが検出されている。検出された溝には朱雀大路西側側溝があり、平安時代中期から後期の遺物が出土している。また、御土居と濠が検出されている。しかしながら西鴻臚館に直接関連する遺構は検出されていない。

2017年の調査地は当調査地西側に位置し、柱穴、井戸が検出されている。井戸は2基検出されておりいずれも鎌倉時代の遺構である。この調査でも西鴻臚館に直接関連する遺構は検出されていない。

それらの成果によって、当調査地内では平安時代後期から室町時代の遺構を検出することが予想された。それらは西鴻臚館廃絶後の遺構と考えられるが、平安時代後期以前の遺構の有無も確認する目的をもって調査を開始することとなった。



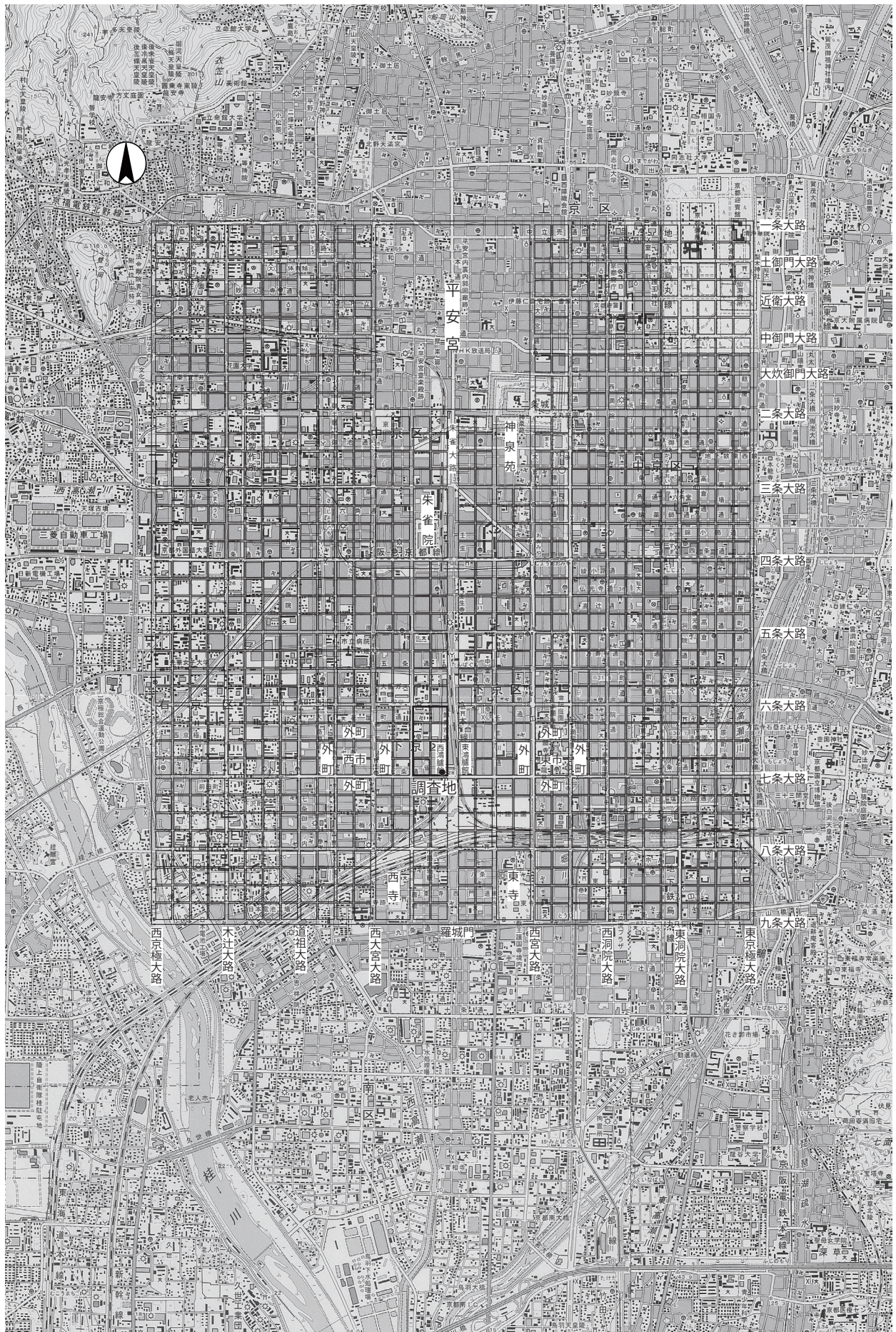


図2 平安京条坊復元図における調査地位置図 (1:40,000)



図3 調査地位置図2 (1:5,000) (京都市都市計画基本図 1:2,500『島原』に加筆)

調査体制としては、主任調査員1名、調査補助員1名の配置を行った。また、京都市文化財保護課の指導により、学術研究に基づいた調査を行うため、調査検証委員会を設立し、同志社女子大学現代社会学部博士（文化史学）山田邦和教授に委員を依頼した。

建物計画範囲は京都市中央卸売市場第一市場水産事務所跡地とほぼ同じ範囲である。試掘調査によって遺物包含層及び遺構が確認されたのは計画範囲西端のみであったため、調査区は建物計画範囲の南西隅に設定され東西約11m、南北約7mが調査対象範囲となった(図6)。また、当初は調査区全体に遺構が検出できるものと想定していた。しかし、近現代に行われた工事のため調査区東半は最終遺構面より下層まで掘削されていた。

基準点は K-001、X= -112098.418、Y = -23573.794、Z= 25.14、

K-002、X= -112097.976、Y = -23553.037、Z= ※参考値 (25.08) を設置した。

2018年9月10日に調査区設定、仮設ハウス、トイレ、バックホー、調査道具類の搬入等を行った。

2018年9月11日に調査区北側から重機掘削を開始し、12日に第一面目の重機掘削は終了した。

2018年9月13日より遺構検出作業を開始し、19日に第一面目の調査は終了した。第一面目では江戸時代の土坑、鎌倉時代から室町時代の溝1を検出した。

2018年9月20日より第二面目の遺構面検出のための重機掘削を行い、遺構検出作業を行った。第二面目では鎌倉時代の流路11とそれを切る柱穴を検出した。21日には第二面目の調査は終了した。流

路 11 は第一面目で検出していたが溝 1 に切られるため第二面目とした。

2018 年 9 月 22 日より最終面となる第三面目の遺構面の検出のため重機掘削作業を開始し同日中に終了した。

2018 年 9 月 25 日に第三面目の遺構掘削作業を開始し同日中に終了した。また完掘全景写真撮影も終了し、最終の記録作業を開始した。第三面目では土坑を検出した。この時は時期は断定できず鎌倉時代以前の遺構と想定した。

2018 年 9 月 26 日に記録作業が終了し、同日から埋戻し作業を開始した。

2018 年 9 月 27 日に埋戻し作業は終了し、併せて仮設ハウス、トイレ、バックホー、調査道具類の搬出等も終了し現地での作業は完了した。

尚、遺構の平面実測、断面実測などの記録作業は遣り方及びトータルステーションにて随時行った。

《参考文献》

(註 1) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1982 年

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡・堂ノ口町遺跡』2017 年



図 4 調査区作業風景（東から）



図 5 調査区作業風景（北から）

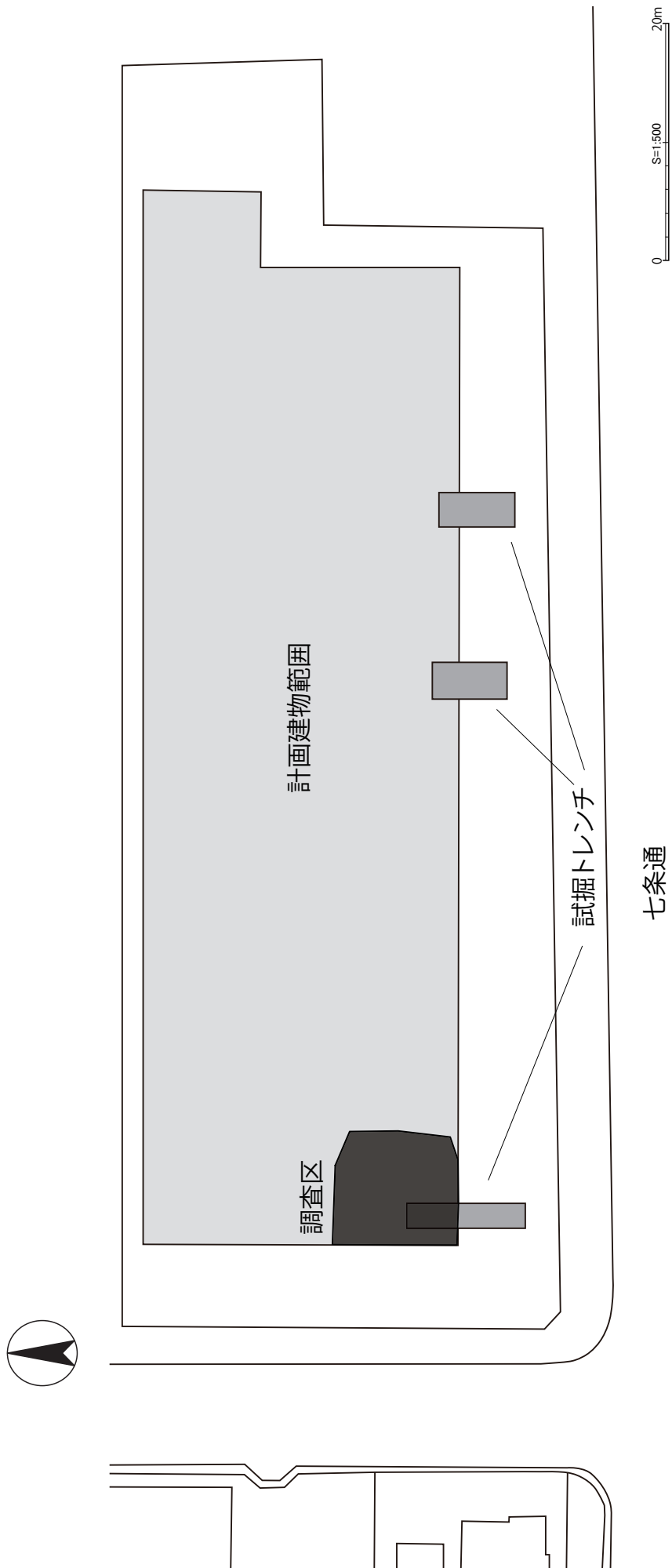


図 6 計画範囲と試掘・調査区配置図 (1 : 500)

## 第2章 位置と歴史的環境

当調査地は京都盆地の中央に位置し、現在の行政区分では京都市下京区朱雀正会町 1-30、朱雀堂ノ口町 20-4 に位置している。東側には西日本旅客鉄道山陰本線が南北に走り、南側には七条通がある。また北側には京都市中央卸売市場第一市場がある。平安京条坊復元図<sup>(註2)</sup>によると、右京七条一坊四町に相当し、七条大路の北側に位置している。四町内においては東二行、北七門に位置している(図7)。

また、古墳時代から奈良時代の遺物散布地である堂ノ口町遺跡にも相当し、範囲内の南側部分に位置する。

『拾芥抄』ではこの右京七条一坊四町と北側の三町を合わせた2町には西鴻臚館が置かれ、朱雀大路を挟んで左京七条一坊三、四町には東鴻臚館が置かれてたとされている。鴻臚館は渤海国使などの外交使節を饗応する施設である。東鴻臚館は早くに廃止されたが、西鴻臚館はその後も存続し、鎌倉時代まで続くようである<sup>(註3)</sup>。その過程で『拾芥抄』『西京図』記されたように右京七条一坊三町のみとなったようである。その後、天正十九(1591)年の豊臣秀吉による御土居の築造などの京都整備によって耕作地化したとみられる。

右京七条一坊四町内における既往の調査は1982年、2017年の京都市中央卸売市場施設整備工事時に財団法人京都市埋蔵文化財研究所(2017年時は公益財団法人)によって発掘調査が実施されている<sup>(註4)</sup>。

1982年時の発掘調査(図7、4-1～10)は三町まで含む大規模なものであった。4-1、3では朱雀大路西側側溝が140mにわたって検出されている。また、4-2、4、6で御土居及び濠も検出されている。当調査区に最も近い4-7、9、10では室町時代の溝や時期不明の土坑が検出されている。中でも4-9、10で検出された溝はL字状に曲がったもので、他の調査区で検出された溝と共に濠として性格を有していたと想定されている。また、4-6では柱穴群、井戸、溝が検出されており、それらは平安時代後期から鎌倉時代の宅地内の様相を示すものとして注目されたようである。

2017年度の発掘調査(図7、5-A～E)では5-Eが右京七条一坊4町に位置している。ここでは、井戸2基と柱穴列3組が検出された。井戸は鎌倉時代のものとされ、鉄滓がまとまって出土したため、西鴻臚館廃止後の宅地利用の一端を表す遺構として推測されている。

その他の周辺の既往の調査は表1にて記す。

### ＜参考文献＞

(註2) 辻 純一「条坊制とその復元」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店1994年

(註3) 山田邦和「右京全町の概要」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店1994年

角田文衛「平安京の鴻臚館」財団法人古代学協会『古代文化42巻8号』1990年

(註4) (註1に同じ)

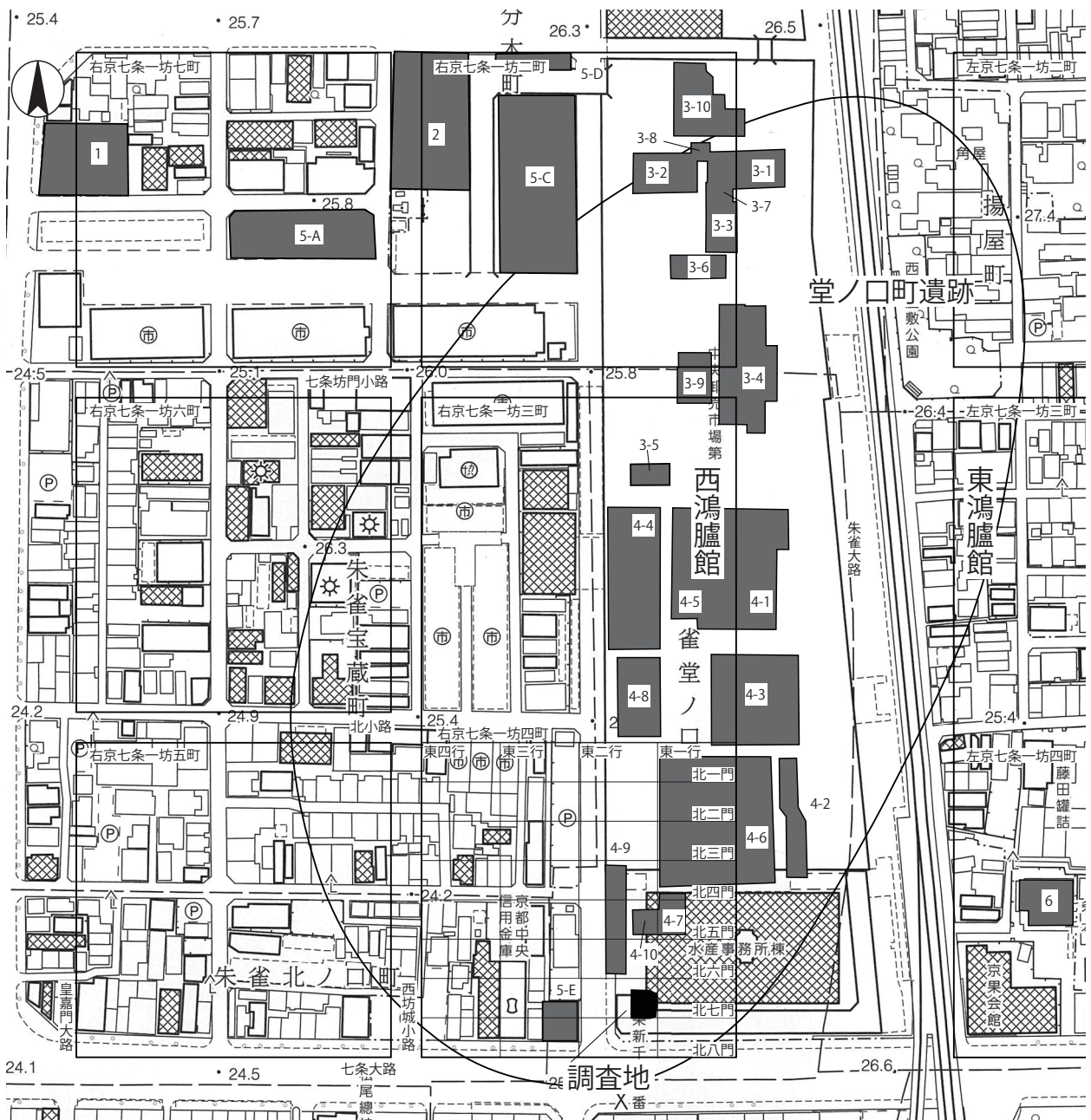


図7 周辺調査地位置図 (1:2,500) (京都市計画基本図1:2,500『島原』に加筆)

表1 周辺調査地の概要 (各報告書より主な成果を抽出)

番号	所在地	調査概要	参考文献
1	京都市下京区朱雀分木町 60 番地	皇嘉門大路東側側溝と内溝、築地底部を検出。	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平安京右京七条一坊七町跡』2016年
2	京都市下京区朱雀分木町地内	西坊城小路東側側溝を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平安京右京七条一坊二町跡』2007年
3	京都市下京区朱雀分木町、堂ノ口町	1、4区にて朱雀大路西側側溝、路面、9区にて七条坊門小路北側側溝を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平成59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987年
4	京都市下京区堂ノ口町 10-1-1 他	1、3区にて朱雀大路西側側溝を140mにわたり検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1982年
5	京都市下京区朱雀正会町 26・28・80 番地、朱雀堂ノ口町 20-3	平安時代から江戸時代の遺構を検出。 C区にて御土居の濠を検出。	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡、御土居跡・堂ノ口町遺跡』2017年
6	京都市下京区朱雀正会町地内 1-20	弥生時代の方形周溝墓の可能性のある遺構、平安時代末から鎌倉時代初頭の溝を検出。	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』2009年

# 第3章 遺構

## 第1節 基本層序

調査区内における基本層序（図8）は現地表面から順に現代盛土、その下層に近代盛土（2層）、続く下層は調査区西壁北側では鎌倉時代から室町時代の溝1の埋土であった。南側では、鎌倉時代から室町時代の遺物を含む暗灰黄色粘質土（25層）、その下層は流路11の埋土であった。南壁で確認できた流路11に切られる土層、西壁南側の流路11下層は河川堆積にみられる小礫を多量に含む砂礫層と砂層であった。それら層の下層で最終面とした黄褐色シルト質土となる。

## 第2節 遺構

検出した遺構は、鎌倉時代の土坑、柱穴、流路、鎌倉時代から室町時代の溝、江戸時代の土坑である。鎌倉時代から室町時代の溝及び江戸時代の土坑は近代盛土除去後に検出した。この面を第一面目とし、流路11埋土掘削中に土坑7を検出したためここを第二面目とした。地山面とした黄褐色シルトにおいては、近代以降の攪乱によって当初から遺構が確認できていたため第三面目として調査を行った。調査区東半は京都市卸売市場第一市場水産事務所棟の跡地であるため削平を受けていた。そのため、その部分を掘削し更に下層を確認した。第三面目の黄褐色シルト層以下では遺構、遺物がみられなかったため、この黄褐色シルト層を最終面とした。以下、第三面目から記す。

### 1. 第三面目の遺構

第三面目の遺構には土坑がある（図10）。

土坑8（図10, 図版2）調査区中央で検出した土坑である。検出面で長径1.05m、短径1.04m、深さ0.2～0.6mである。上面は流路11、西側は溝1、流路11に切られる。埋土は灰黄褐色シルトが主体である。遺物は土師器、瓦器、漆器が出土している。

土坑10（図10, 図版2）調査区西側で検出した土坑である。検出面で長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mである。上面は流路11、東側を溝1に切られる。埋土は灰黄褐色シルトが主体である。遺物は出土していない。

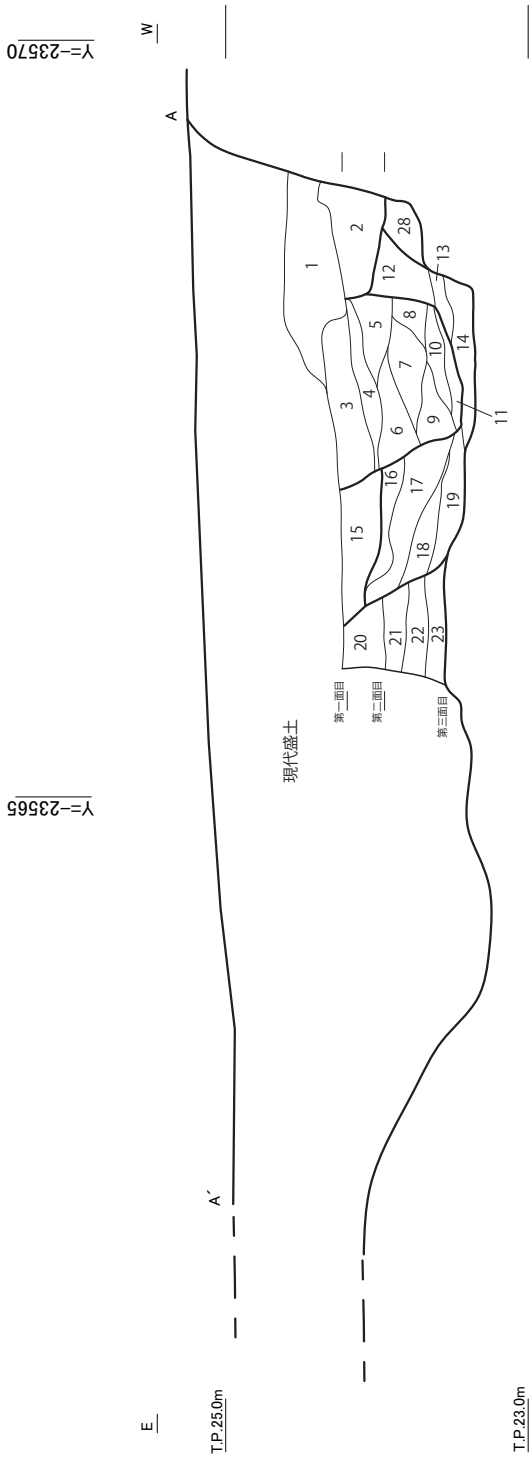
### 2. 第二面目の遺構

第二面目の遺構には鎌倉時代の柱穴、流路がある（図11）。柱穴は流路埋土掘削中に検出した。

土坑7（図11, 図版1）調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径0.48m、短径0.3m、深さ0.32mである。埋土は黒褐色粘質土に細砂が混ざる。流路11の西側を切る。遺物は土師器、磁器、瓦質土器、石製品が出土している。

流路11（図8, 9, 11, 図版1）調査区西側で検出した流路である。検出面で長さ7.8m、幅は1.18～3.66m、深さ0.88～0.98mである。埋土は灰黄褐色粘質土と灰黄褐色細砂が主体である。南側、北側は南北壁に、西側は西壁に入り込むため全体は不明である。東側は土坑2、溝1に、西側は土坑5、6、7に切られる。遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦器、瓦質土器、鉄製品が出土している。

南壁土層断面



西壁土層断面

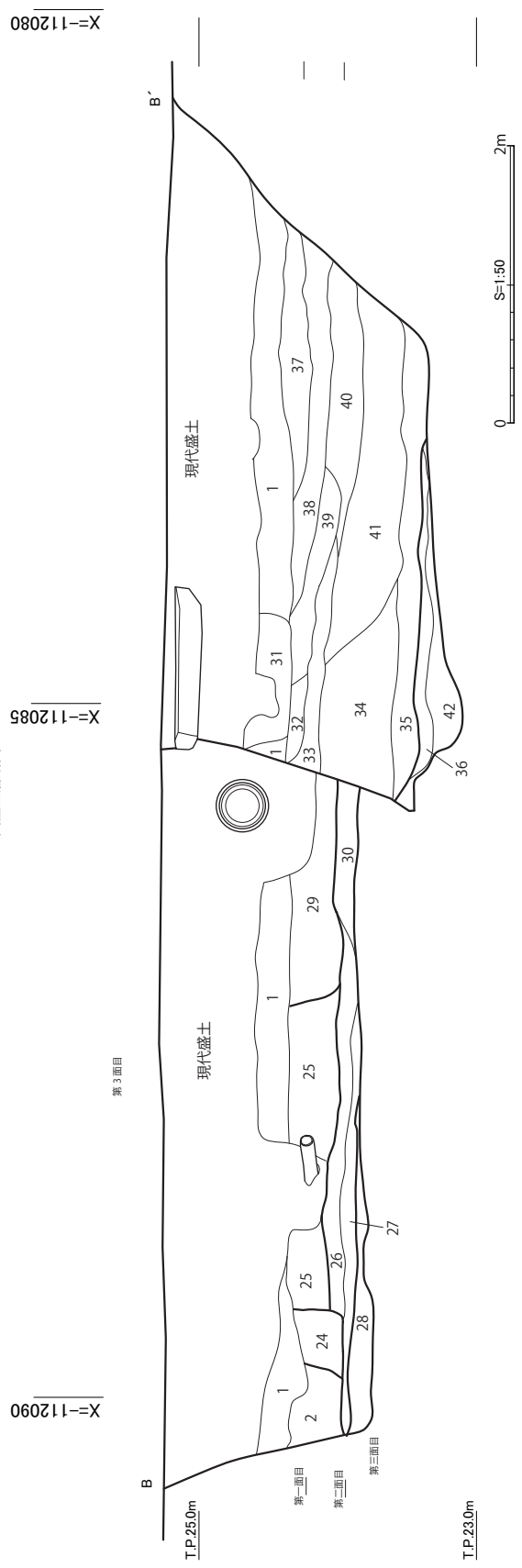
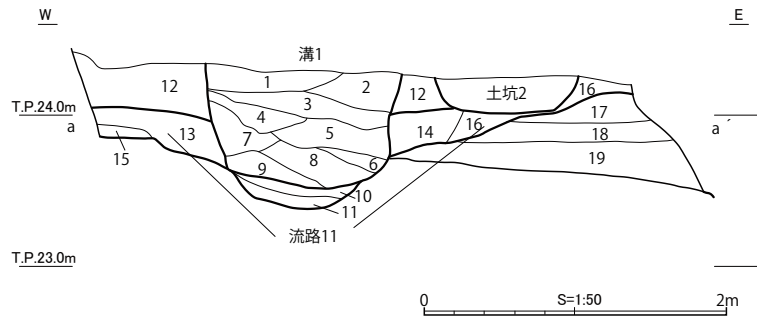


图8 南壁土層断面图、西壁土層断面图 (1:50)



1. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がブロック状に混じる [近代盛土]
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 [土坑 5]
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 [近代盛土]
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂が混じる [溝 1]
5. 4 に 10YR4/1 褐灰色粘質土がわずかに混じる [溝 1]
6. 10YR4/2 灰黄褐色細砂に 10YR4/4 褐色細砂がまだらに混じる [溝 1]
7. 6 に 10YR4/1 褐灰色粘質土がブロック状に少し混じる [溝 1]
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる [溝 1]
9. 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂がまだらに混じる [溝 1]
10. 10YR3/2 黒褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色細砂がまだらに混じる [溝 1]
11. 10YR4/1 褐灰色細砂に 7.5YR4/2 灰褐色粗砂がまだらに混じる (礫多く含む) [溝 1]
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色粘質土がわずかに混じる [流路 11]
13. 10YR5/2 灰黄褐色シルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂が少し混じる [流路 11]
14. 10YR4/4 褐色粗砂に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる [流路 11]
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土に 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土がまだらに混じる [中世包含層]
16. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土がまだらに混じる [流路 11]
17. 10YR3/2 黒褐色粘質土に 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土がまだらに混じる [流路 11]
18. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 7.5YR4/4 褐色粗砂がまだらに混じる (礫多く含む) [流路 11]
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 7.5YR4/4 褐色細砂がわずかに混じる (礫多く含む) [流路 11]
20. 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる (小礫多く含む)
21. 10YR4/1 褐灰色粗砂に 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂がわずかに混じる (小礫多く含む)
22. 10YR5/2 灰黄褐色細砂に 10YR4/4 褐色粗砂がまだらに混じる (小礫多く含む)
23. 10YR4/1 褐灰色粗砂に 7.5YR4/4 褐色細砂がわずかに混じる (礫多く含む)
24. 2 に 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトがわずかに混じる [土坑 6]
25. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 10YR4/4 褐色粘質土がまだらに混じる [中世包含層]
26. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混じりの細砂 [流路 11]
27. 10YR4/1 褐灰色粗砂 [流路 11]
28. 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりのシルト (小礫多く含む)
29. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 2.5Y5/3 黄褐色粘質土がわずかに混じる [土坑 3]
30. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト混じりの粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色粘質土がまだらに混じる [流路 11]
31. 10YR3/4 暗褐色粘質土 [近代盛土]
32. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色細砂混じりの粘質土がまだらに混じる [溝 1]
33. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土に 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土がわずかに混じる [溝 1]
34. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR5/1 褐灰色細砂がまだらに混じる [溝 1]
35. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトに 10YR4/4 褐色細砂がわずかに混じる [溝 1]
36. 10YR4/2 灰黄褐色粘土に 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂がまだらに混じる [流路 11]
37. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる [溝 1]
38. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に 10YR5/2 灰黄褐色細砂がわずかに混じる [溝 1]
39. 10YR4/2 灰黄褐色粘土混じりの粘質土に 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土がまだらに混じる [溝 1]
40. 10YR4/2 灰黄褐色粘土に 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂がわずかに混じる [溝 1]
41. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりの粗砂に 10YR4/2 灰黄褐色粘質土がブロック状に混じる [溝 1]
42. 10YR4/1 にぶい黄褐色粘質土混じりの細砂 [流路 11]

表 2 南壁土層断面図、西壁土層断面図注記



- 土坑2. 10YR3/2 黒褐色粘質土
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/1 褐灰色細砂混じりの粘質土がまだらに混じる [溝 1]
  2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 [溝 1]
  3. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりの粘質土に 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂がブロック状に混じる (礫多く含む) [溝 1]
  4. 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じりの細砂 [溝 1]
  5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂混じりの粘質土 [溝 1]
  6. 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR4/2 灰黄褐色細砂がまだらに混じる [溝 1]
  7. 4 に 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土がまだらに混じる [溝 1]
  8. 2.5Y4/1 黄灰色粗砂に 7.5YR4/4 褐色粗砂がブロック状に混じる [溝 1]
  9. 10YR4/1 褐灰色細砂混じりの粘質土に 8 がわずかに混じる [溝 1]
  10. 10YR3/1 黒褐色細砂混じりの粘質土に 10YR5/1 褐灰色シルトがブロック状に混じる [流路 11]
  11. 7.5Y4/1 灰色シルトに 10YR4/2 灰黄褐色細砂がブロック状にわずかに混じる [流路 11]
  12. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土がわずかに混じる
  13. 10YR4/1 褐灰色細砂混じりの粘質土に 10YR4/4 褐色細砂がわずかに混じる [流路 11]
  14. 2.5Y5/3 黄褐色細砂に 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりの粘質土がまだらに混じる [流路 11]
  15. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に 10YR4/4 褐色細砂が少し混じる [流路 11]
  16. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 [流路 11]
  17. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりの粗砂 (礫多く含む)
  18. 10YR3/1 黒褐色細砂 (多量の礫含む)
  19. 10YR5/2 灰黄褐色細砂 (礫多く含む)

図 9 溝 1、流路 11 土層断面図 (1:50)

### 3. 第一面目の遺構

第一面目の遺構には土坑、溝がある（図 12）。土坑は江戸時代の遺構で、溝は鎌倉時代から室町時代の遺構である。

土坑 2（図 9、12, 図版 1） 調査区中央で検出した土坑である。検出面で長径 0.93m、短径 0.39m、深さ 0.23m である。埋土は黒褐色質土が主体である。溝 1、流路 11 の東側を切る。遺物は土師器、須恵器、陶器、瓦が出土している。

土坑 3（図 8、12, 図版 1） 調査区中央の西側で検出した土坑である。検出面で長径 1.48m、短径 0.43m、深さは 0.39m である。埋土は灰色粘質土を主体とする。西側は西壁に入り込むため全体は不明である。流路 11 の西側を切る。遺物は土師器、土師質土器、陶器、磁器が出土している。

土坑 5（図 8、12, 図版 1） 調査区南西角で検出した土坑である。検出面で長径 0.78m、短径 0.56m、深さ 0.34m である。埋土は灰黄褐色粘質土が主体である。西壁、南壁に入り込むため全体は不明である。土坑 6 の南側、溝 1、流路 11 の西側を切る。遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土している。

土坑 6（図 8、12, 図版 1） 調査区南西角で検出した土坑である。検出面で長径 0.39m、短径 0.36m、深さ 0.34m である。埋土は灰黄灰色粘質土が主体である。南側は土坑 5 に切られるが、流路 11 を切る。遺物は土師器、須恵器が出土している。

溝 1（図 8、9、12, 図版 1） 調査区西側で検出した溝である。長さ 7.8m、幅 0.4～1.74m、深さ 0.68～0.79m である。埋土は黒褐色～灰黄褐色粘質土が主体である。土坑 2、3、5、6、近世以降の攪乱に切られる。流路 11 を切る。南北は南北壁に伸び全体は不明である。遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、瓦、磚、金属製品が出土している。

Y=-23570

Y=-23565



X=-112080

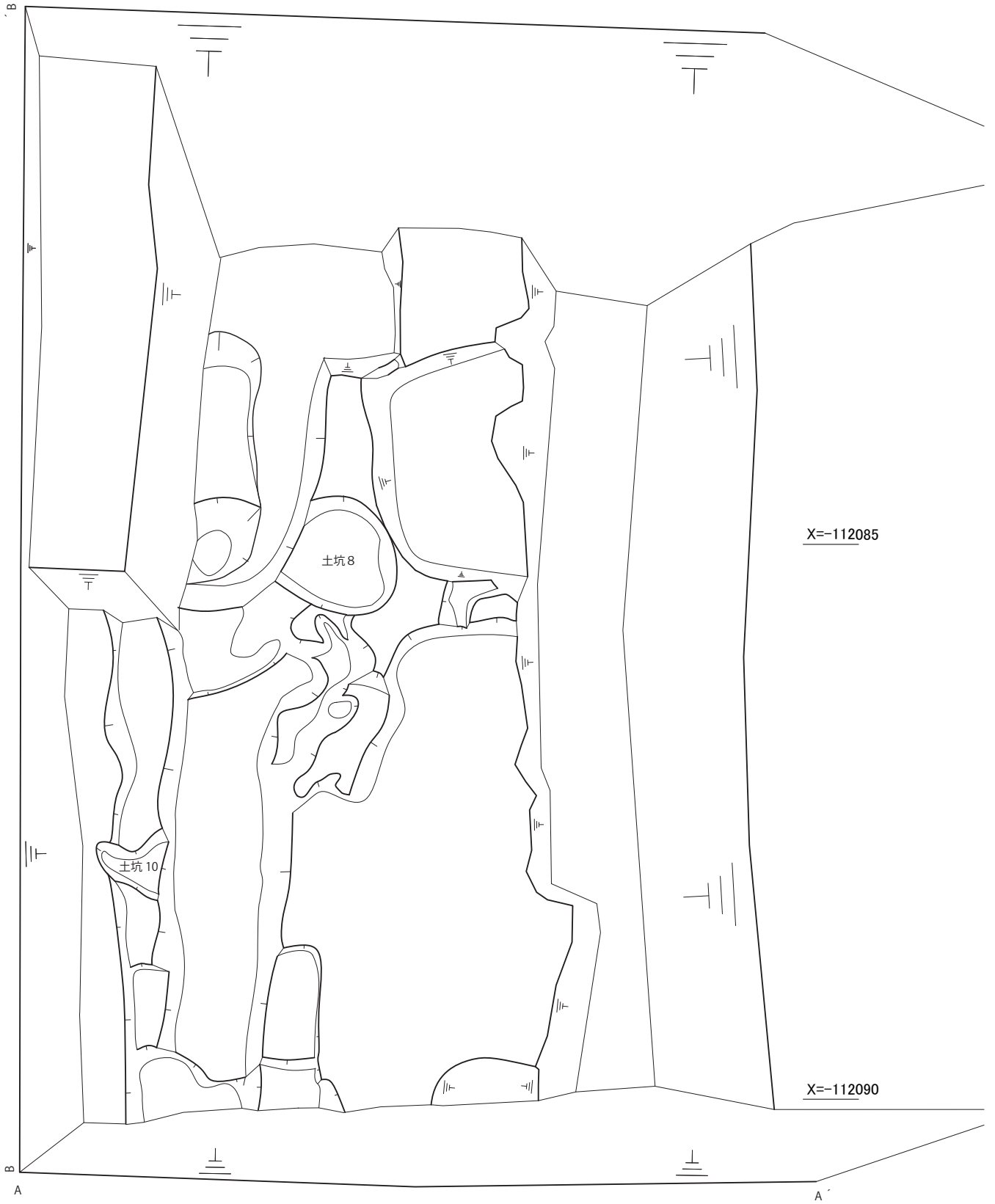


图 10 1. 第三面目遺構平面圖 (1 : 50)

Y=-23570

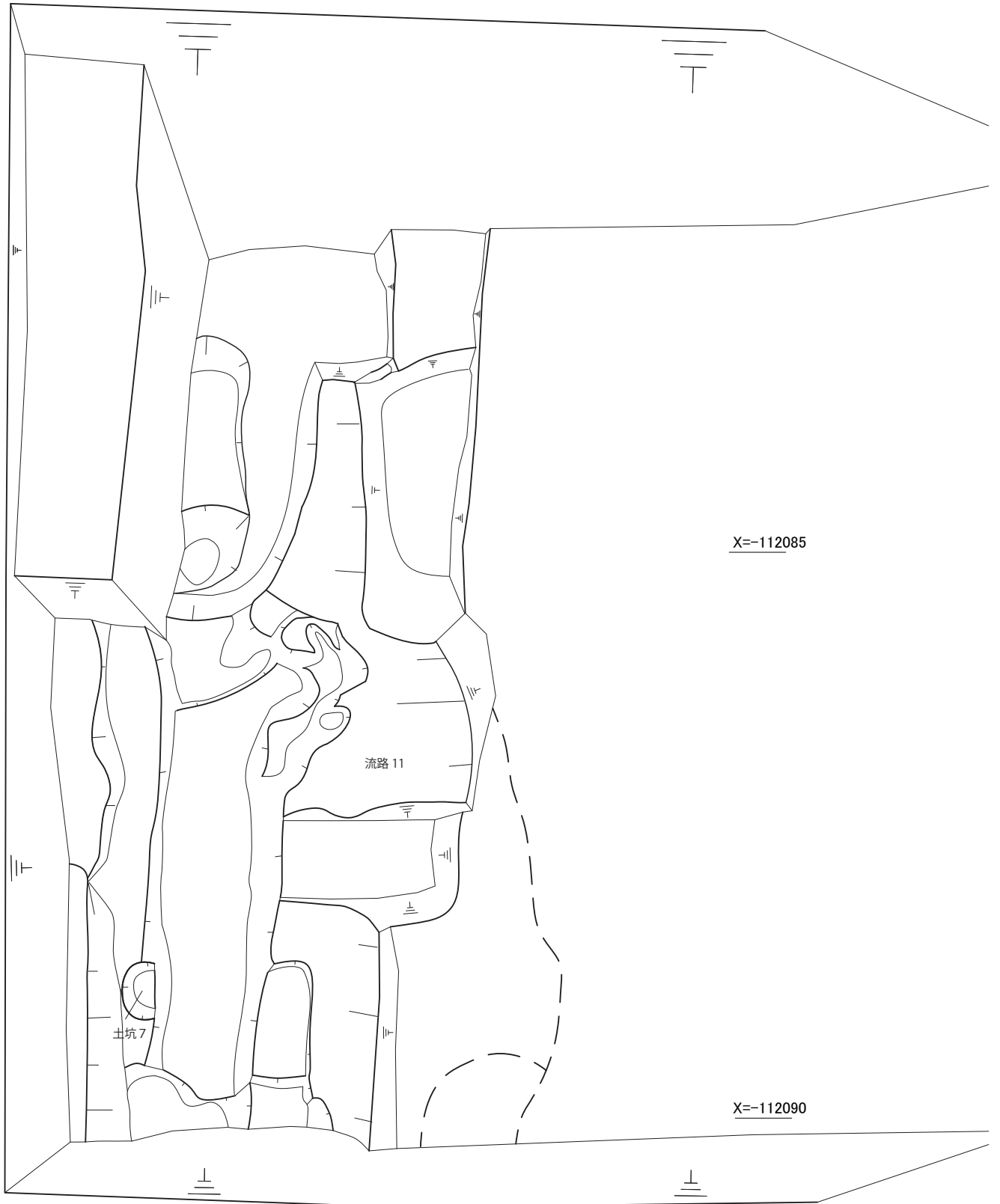
Y=-23565



X=-112080

X=-112085

X=-112090



0 S=1:50 2m

图 11 2. 第二面目遺構平面図 (1 : 50)

Y=-23570

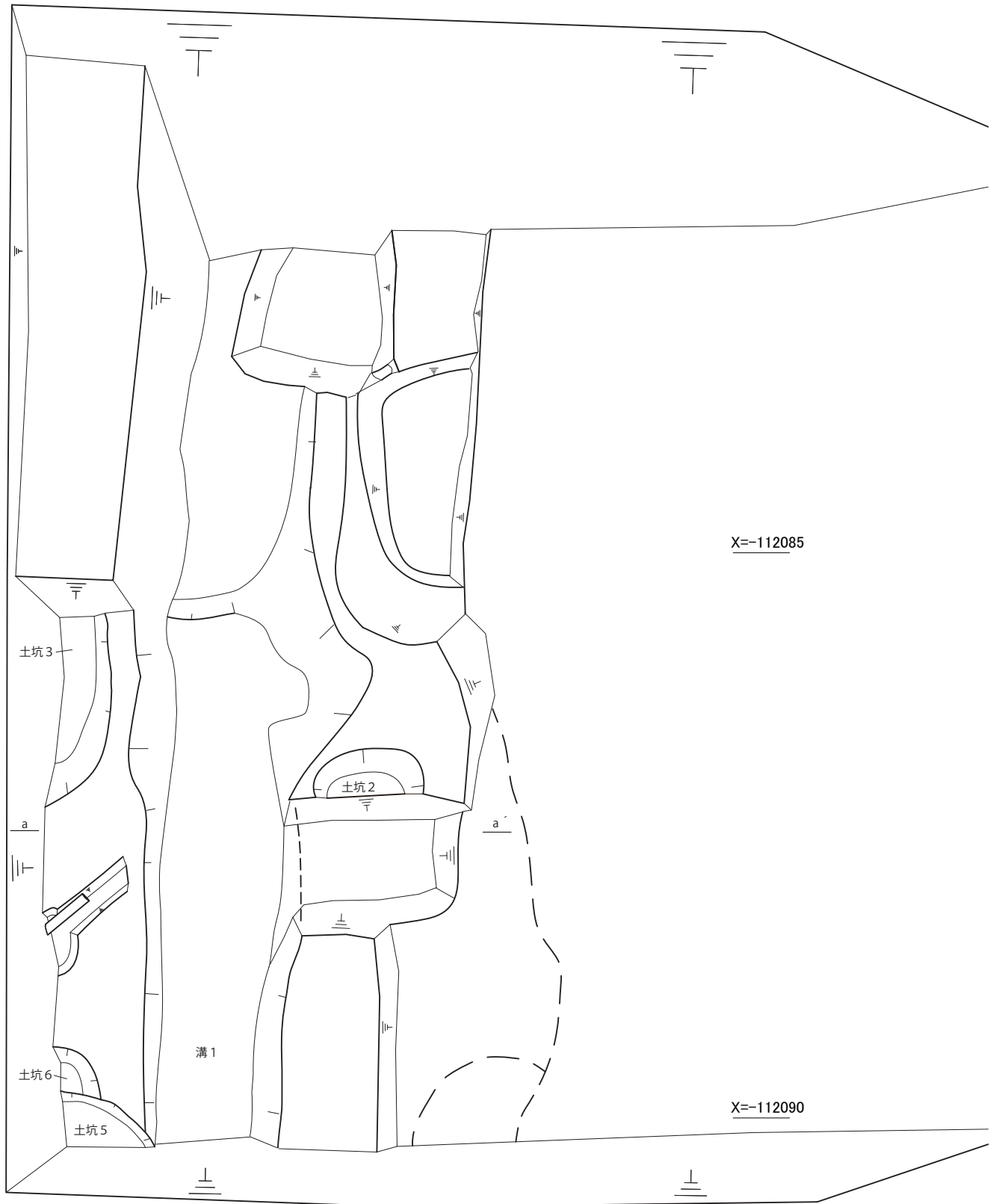
Y=-23565



X=-112080

X=-112085

X=-112090



0 S=1:50 2m

图 12 3. 第一面目遺構平面図 (1 : 50)

# 第4章 遺物

## 第1節 遺物の概要

今回出土した遺物はコンテナバットに7箱で、土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入磁器、焼締陶器、染付、土師質土器、瓦器、瓦質土器、石製品、木製品、金属製品、瓦類、鉄滓が出土している。遺物の時期は平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のものである。

出土した遺物は細片が大多数で、中心となる時期は鎌倉時代から室町時代である。京都土器編年では京Ⅷ期からⅨ期（13世紀後半から15世紀前半）に当たる時期<sup>(注5)</sup>である。特に溝1からの出土が多く、次いで流路11からの出土が多かった。

表3 出土遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器、金属製品、瓦類		瓦2点、緑釉陶器1点、銭貨1点		
鎌倉時代から室町時代	土師器、須恵器、輸入磁器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、木製品、石製品、金属製品、瓦		土師器17点、須恵器1点、瓦器4点、瓦質土器7点、輸入磁器6点、焼締陶器2点、施釉陶器2点、瓦1点		
江戸時代	土師器、磁器、陶器		土師器1点、染付1点		
不明	瓦、三彩陶器、木製品、金属製品		瓦1点、三彩陶器1点、漆器1点、釘1点		
合計		7箱	50点(2箱)	0箱	5箱

## 第2節 出土遺物

土坑8(図13, 図版3)1は器種不明の陶器の破片である。釉は明るい緑色である。外面には濃い緑色部分が一部あるため、そこには模様があるとみられる。唐三彩かとみられる。2は瓦器碗である。体部は丸を帯びて立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。内面のヘラミガキは粗い。3は漆器の破片とみられる。全体には黒漆が塗られ、模様部分は朱漆が塗られている。模様は蝶かと考えられる。

流路11(図13, 図版3)4~7は土師器皿である。4の体部は外反しながら立ち上がる。5の体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は上方へ向かう。6の体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方へ向かう。体部外面には指頭圧痕が残る。7の体部は外反しながら立ち上がり、口縁部でやや屈曲する。8は瓦器碗である。体部はやや斜め方向に丸みを持って立ち上がり、途中屈曲して口縁部は上方へ向かう。口縁端部内面には浅めの沈線が1条巡る。内面のヘラミガキは粗い。9は瓦質土器の鍋である。口縁部は外側に屈曲し端部は上方に向かう。

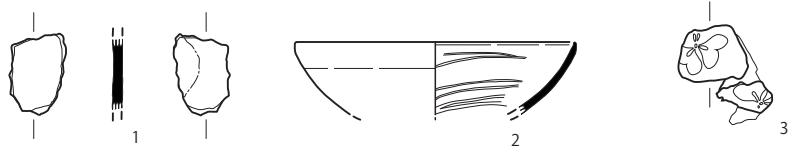
溝1(図13, 14, 図版3, 4)10~21は土師器皿である。10の体部は丸みを帯びて立ち上がる。11の

体部は外反しながら立ち上がる。体部下位の器壁は薄い。12の体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は上方へ向かう。13、21の体部は丸みを帯びて立ち上がり、屈曲して外反する。口縁端部は上方へ向かう。14から18の体部は外反しながら立ち上がり口縁端部は上方へ向かう。15の体部外面には指頭圧痕が残る。19の体部はやや外反しながら立ち上がる。20の体部は外反しながら立ち上がり、やや屈曲して更に外反する。22は東播系須恵器の捏鉢である。23は緑釉陶器碗である。高台は蛇の目高台である。24、25は焼締陶器の甕である。24の口縁部は大きく外反する。25の口縁部は丸く収め、玉縁状になる。口縁形態から24は常滑焼、25は備前焼とみられる。26は灰釉陶器の椀である。内外に施釉される。27は灰釉陶器の皿である。底部内面に沈線が4条巡る。残存する体部外面、高台外側には施釉されていない。底部外面は卸目状になっている。26、27は瀬戸美濃系のものとみられる。28～30は白磁である。28は口禿の皿である。体部は斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。大宰府陶磁器分類の皿Ⅸ類で13世紀後半から14世紀前半のものと考えられる。29は碗である。底部内面見込み部分の釉を環状に剥ぎ取る。底部外面には糸切痕が残る。高台は断面台形状を呈す。大宰府陶磁器分類の椀Ⅷ類で12世紀中から後半のものと考えられる。30は碗である。底部内面には櫛目文がみられる。体部外面と高台の境目まで施釉される。高台はやや高めである。大宰府陶磁器分類の椀Ⅴ類で11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。31～33は青磁である。31、32は椀である。31の高台は台形状を呈し、底部の器壁は厚い。高台内側は施釉されていない。大宰府陶磁器分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類で14世紀代のものと考えられる。33は皿である。体部はやや外反しながら立ち上がる。体部内面と底部内面見込み部分でわずかに段になる。34は瓦器杯である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は上方へ向かう。ヘラミガキは粗い。35～37は瓦質土器の羽釜である。35の口縁は内傾し36、37の口縁部は上方へ向かう。いずれも口縁端部に面を持つ。35、37の内面には刷毛目がみられる。38～40は瓦質土器の鍋である。いずれの口縁部は外側に屈曲し、端部は上方へ向かう。内面には刷毛目がみられ、38、39の体部外面には指頭圧痕が残る。41～43は瓦である。41は小型の三巴文軒丸瓦である。瓦当裏面はナデ調整されている。42、43は平瓦である。凹面には布目痕が残り、凸面は縄目叩痕がみられる。44は釘である。長さ2.8cm、厚さ0.38cmである。45は銭貨である。摩滅や欠損により判読しがたいが、判読できる部分で1111年初鑄の「政和通宝」であると考えられる。

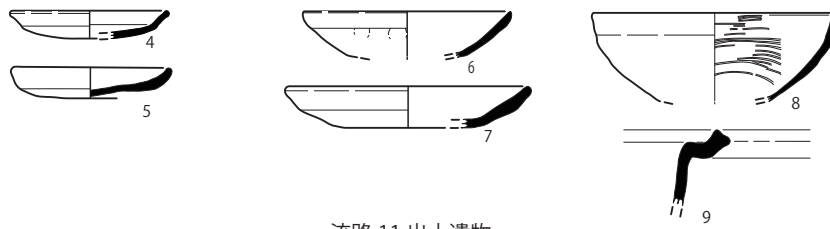
土坑2(図15, 図版5) 46は土師器皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。

土坑3(図15, 図版5) 47は土師器皿である。体部は外反しながら立ち上がる。体部下位の器壁は薄い。48は染付皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや外反する。高台は台形状を呈する。内外面に施釉されている。

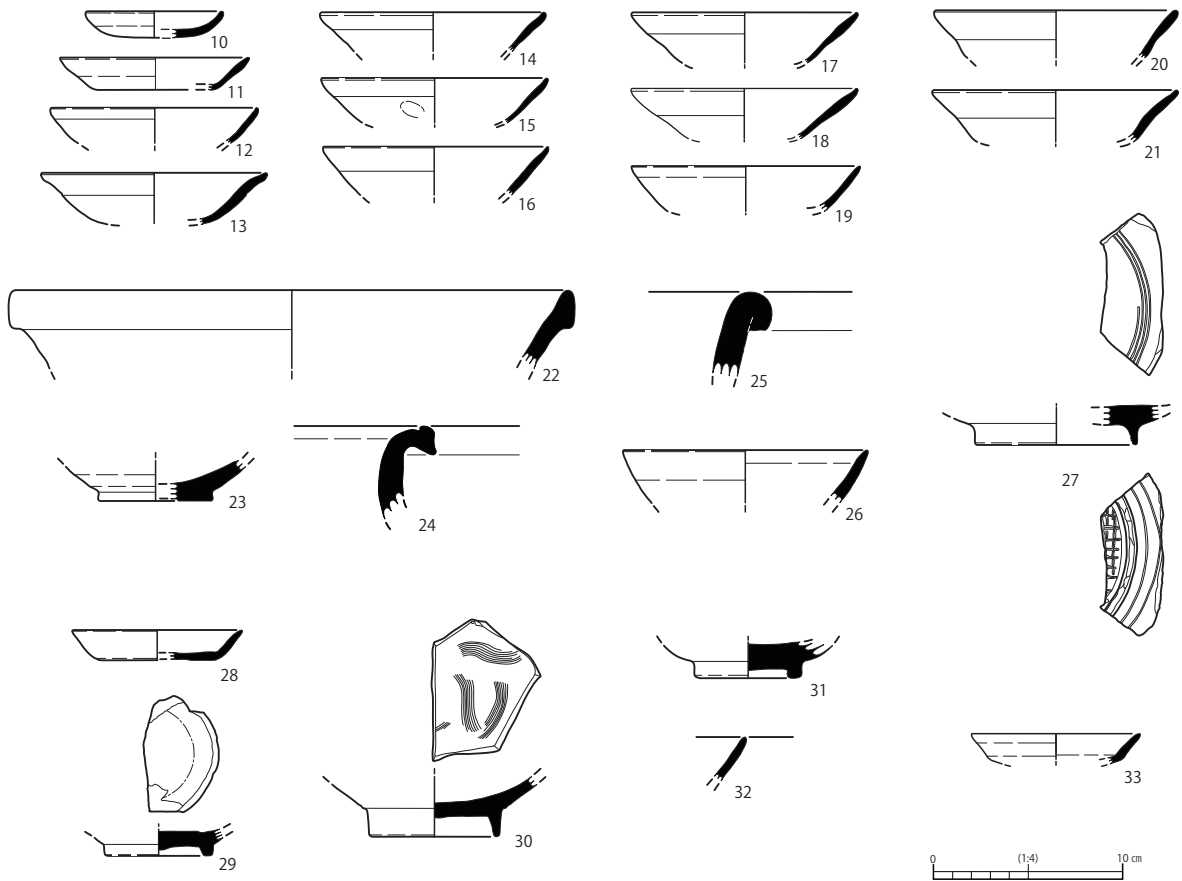
第一面目包含層(図22, 図版5) 49は土師器皿である。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方へ向かう。50は軒丸瓦である。ほぼ欠損しているため珠文のみ残る。瓦当裏面にはナデ調整されている。



土坑 8 出土遺物



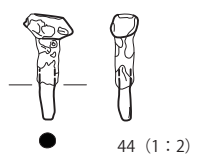
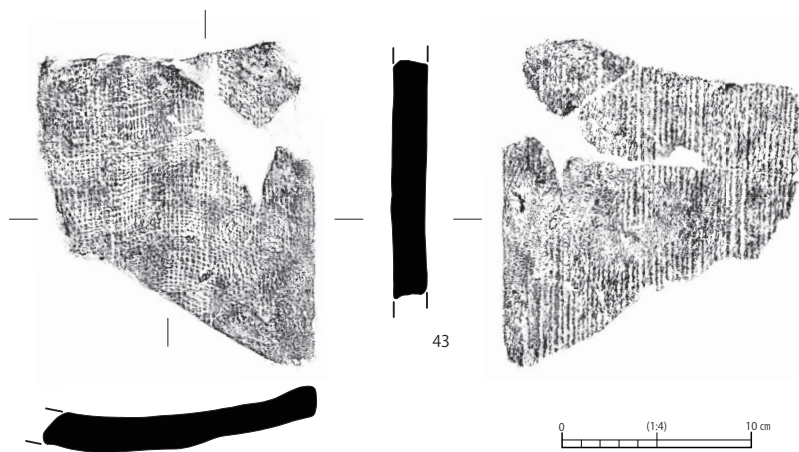
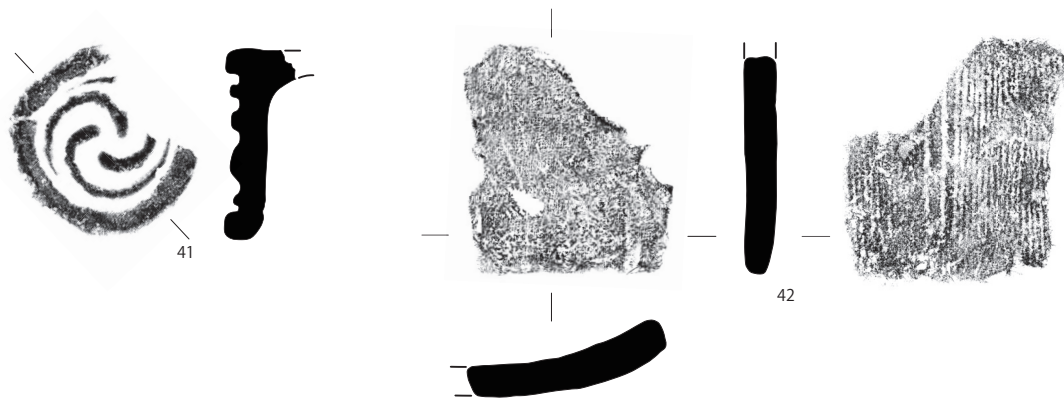
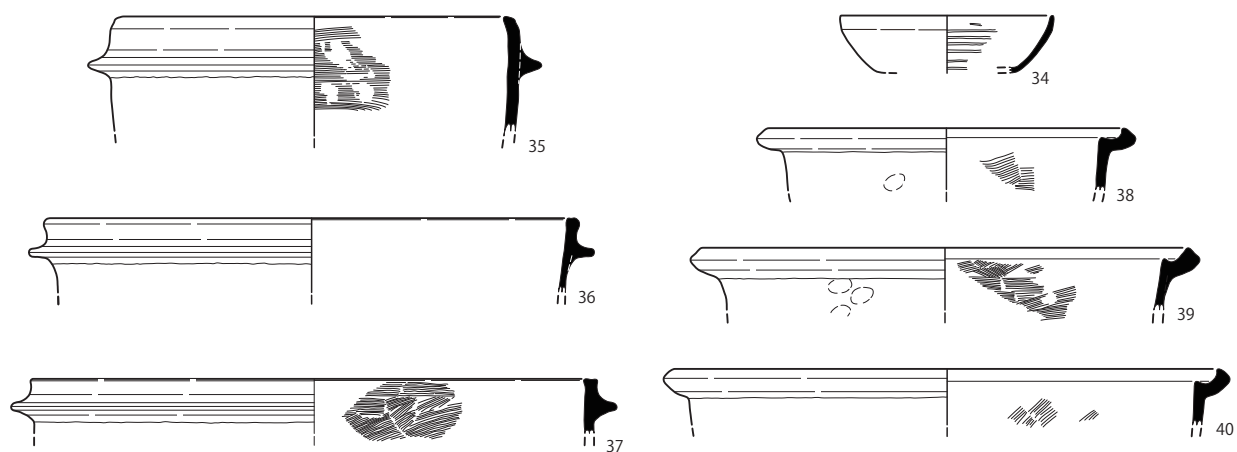
流路 11 出土遺物



溝 1 出土遺物 (1)

图 13 出土遺物 1 (1:4)





溝1出土遺物 (2)

圖 14 出土遺物 2 (土器、瓦 1:4、釘 1:2、錢貨 1:1)

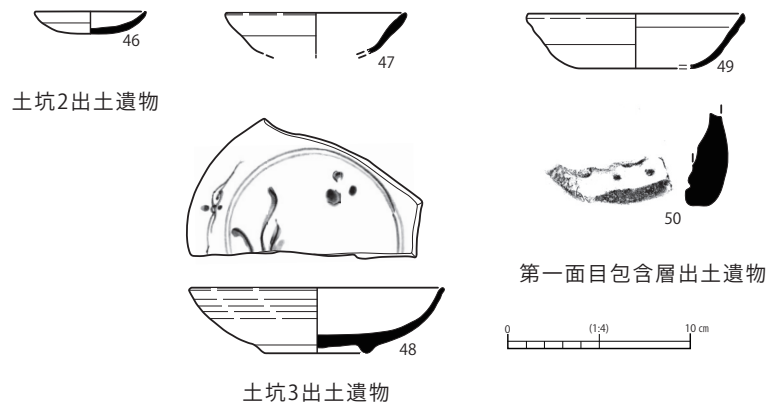


図 15 出土遺物 3 (1:4)

《参考文献》

(註 5) 土器については凡例で示したものの他に

財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994 年

太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XIV - 陶磁器分類編 -』2000 年

を参照した。

## 第5章 総括

今回、発掘調査を実施した京都市下京区朱雀正会町 1-30、朱雀堂ノ口町 20-4 は平安京右京七条一坊四町内の東二行、北七門に位置している。当調査地を含む右京七条一坊四町と北側の三町は西鴻臚館が設置されていたとされている。四町内では公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所によって 1982 年、2017 年に発掘調査が実施されている。これら発掘調査によって朱雀大路西側側溝等の平安時代から室町時代の遺構が検出された。1982 年実施の発掘調査は大規模なものであったが、2017 年実施の発掘調査によっても西鴻臚館に直接関連する遺構は確認されていない。周辺の調査成果から当調査地においても西鴻臚館に関連する遺構が検出する可能性は低いと考えられた。しかし、1982 年の発掘調査は調査地のすぐ北側の京都市中央卸売市場第一市場で実施されたもので、平安時代後期から室町時代の遺構が多く検出されている。そこで、西鴻臚館に関連する遺構の有無を念頭に置きつつ、1982 年の発掘調査で検出された遺構と関連する遺構の確認を行う目的をもって発掘調査を実施した。

発掘調査開始直後に東側半分は遺構面が削平されていることが判明したため、西側半分のみ調査となったが、鎌倉時代から江戸時代の遺構を検出することができた。主な遺構としては南北に延びる溝 1、流路 11 であるが残存した調査区の西側のほとんどを占めており、溝 1 が流路 11 を切る形で検出した。遺構数はわずかであるが、以下、調査区内の変遷を記す。

土坑 8 で出土した土師器は 12 世紀後半～13 世紀前半に属するため平安時代後期から鎌倉時代の遺構と考えられた。しかし、その後出土した瓦器椀が 13 世紀代のものとみられるため、鎌倉時代の遺構と考えたほうがよいと判断した。但し、流路 11 に上部を切られることから流路 11 より古い遺構であることは確かである。また、漆器椀の破片や唐三彩とみられる施釉陶器の破片が出土している。

鎌倉時代から室町時代の遺構に土坑 7、溝 1、流路 11 がある。鎌倉時代の遺物が出土した流路 11 を切るように土坑 7 があった。溝 1 は土坑 7 の東側、流路 11 の西側を切っていた。土坑 7、流路 11 共に鎌倉時代の遺物が出土している。溝 1 では 13 世紀後半から 15 世紀前半までの遺物が出土している。鎌倉時代の遺物は流路 11 を切っている性質上混ざり込んだものや、埋没時に入り込んだものと考えられる。他にも平安時代の瓦や宋銭などが出土しているが、これらも埋没していく段階で入り込んだものであろう。そのため、溝 1 は 13 世紀後半から 14 世紀前半の遺物が出土した流路 11 が埋没した時期以降の鎌倉時代末から室町時代初め頃の 14 世紀前半以降に溝として機能し始め、溝 1 上層から下層出土遺物に 15 世紀前半までの遺物を含んでいるため室町時代中頃までは機能していた可能性は考えられる。大まかには、鎌倉時代のどこかの時期で流路 11 が埋没し、柱穴 7 の時期を経て、溝 1 が掘削され長い間利用されたと考えられる。

その後、豊臣秀吉により御土居築造などの京都整備がなされてからは耕地化したと考えられるが、耕作溝などは検出できなかった。そして江戸時代の遺物を出土した土坑 2、3、5、6 が掘削されたとみられる。これら土坑は遺物はあまり多く出土していないため、廃棄土坑ではなく耕作に伴って掘削されたものか土取り穴と考えられる。

今回の発掘調査は、調査区が狭く、遺構数も少なかったため、限定的な記述しかできなかった。また、当調査地においても鴻臚館跡に直接関連する遺構は検出できなかった。しかし、主な成果としては鎌倉時代から室町時代の遺物が出土した溝 1 を検出したことである。この溝 1 は 1982 年の発掘調査 7、10 区で検出された SD765 の方向に延びるため同一の遺構となる可能性が考えられる。

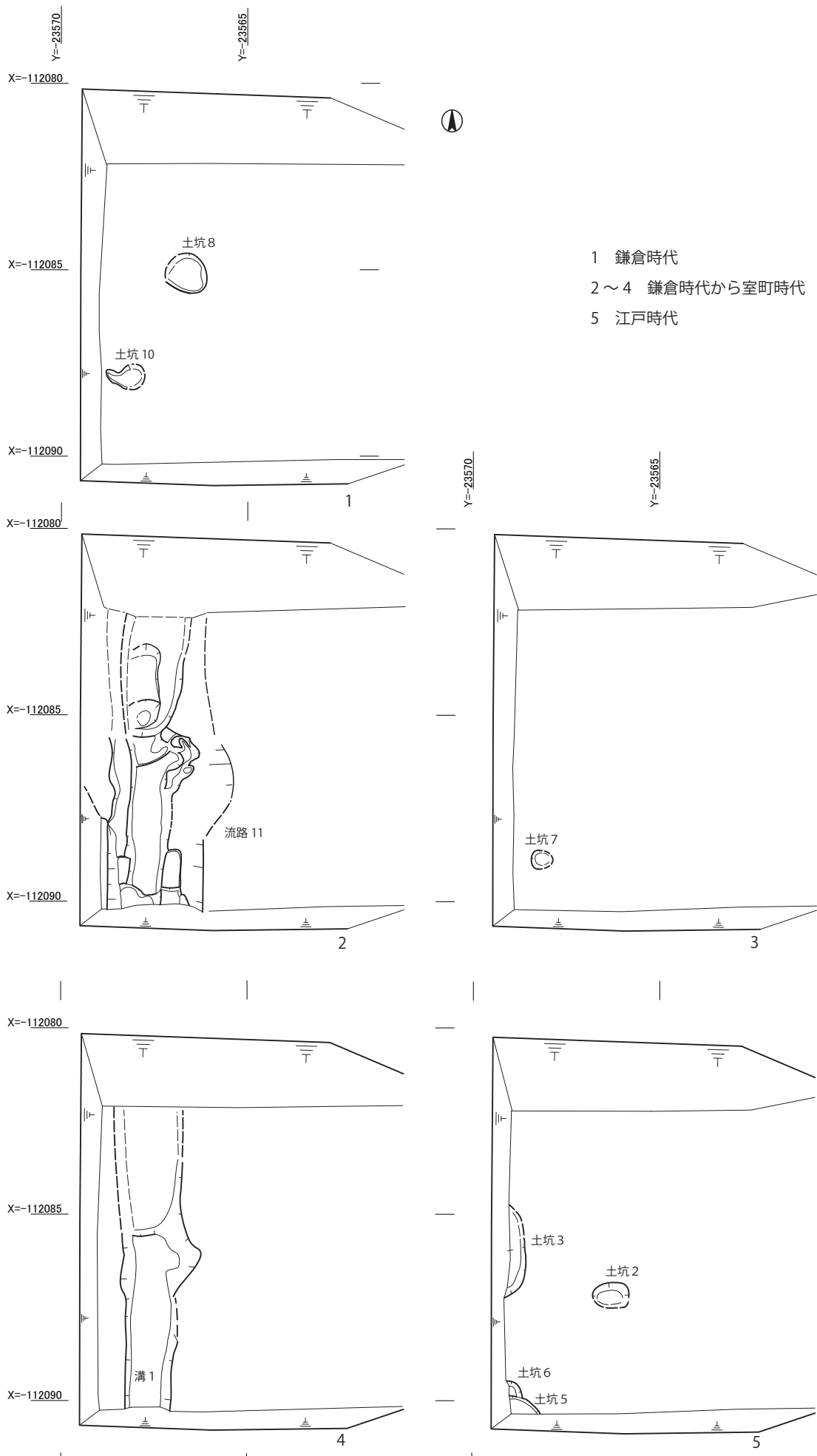


図 16 調査区遺構変遷図 (1 : 150)

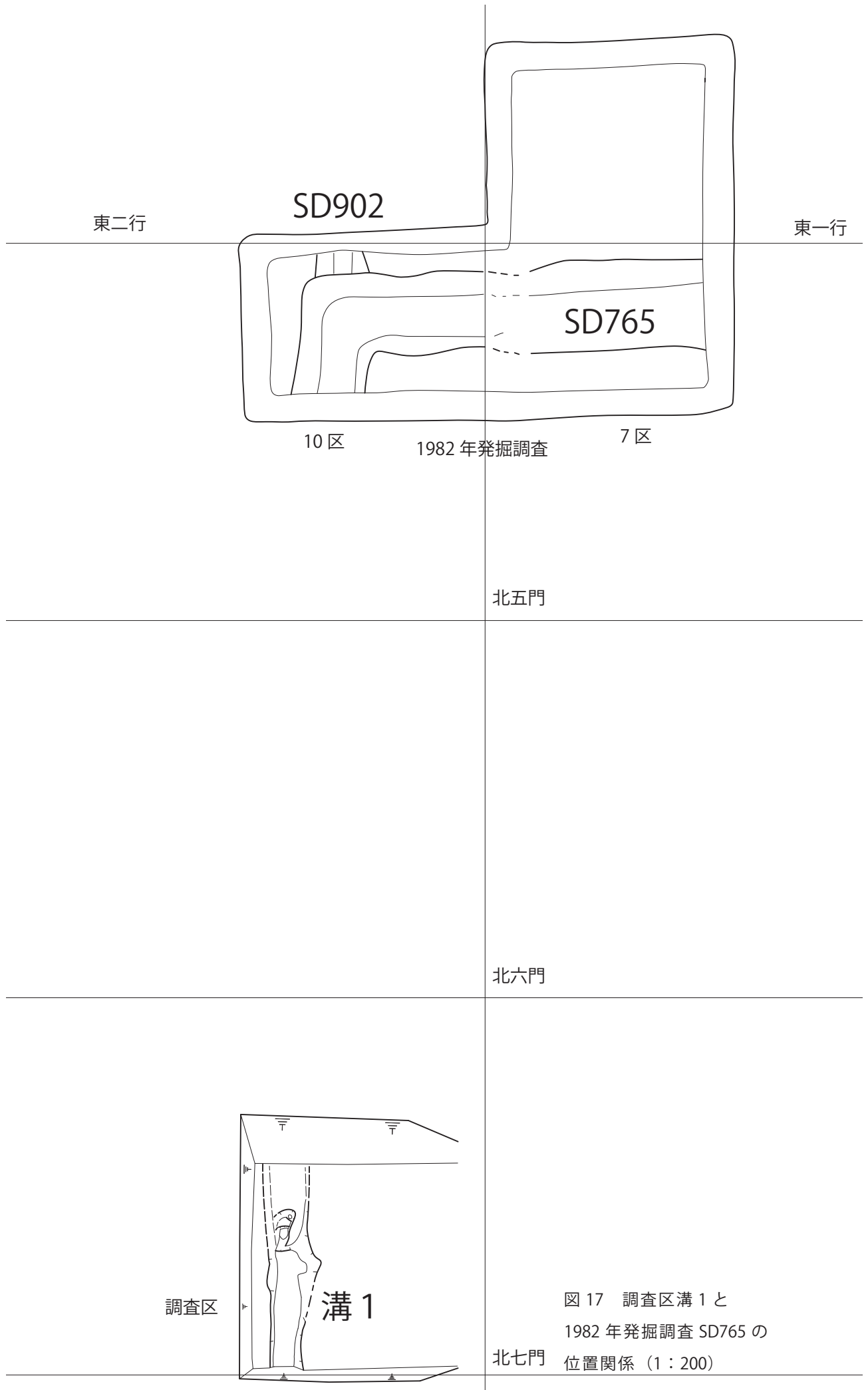


図17 調査区溝1と  
1982年発掘調査SD765の  
位置関係 (1:200)

表4 遺物観察表1

※法量のカッコ内は土器の口径・底径は復元、器高は残存、瓦はいずれも残存

報告書 No.	出土遺構	器種	器形	口径	器高	底径	形成技法の特徴	色調	胎土	備考
図13-1	土坑8	陶器	不明	—	(3.6)	—	内外面に施釉	釉:緑色 素地:2.5YR7/4 淡赤褐色	良	唐三彩か
図13-2	土坑8	瓦器	椀	(14.6)	(3.8)	—	内面はヘラミガキ、暗文有 外面は口縁部ナデ	内外面:7.5Y3/1 オリーブ黒色	良	13世紀代
図13-3	土坑8	漆器	不明	—	—	—	内外面に漆、蝶模様か	全体:黒漆 模様:朱漆	良	
図13-4	流路11	土師器	皿	(8.1)	(1.5)	—	体部内面から外面にかけてナデ	内面:10YR7/3 にぶい黄褐色 外面:10YR7/4 にぶい黄褐色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-5	流路11	土師器	皿	8.2	1.6	6.8	体部内面から外面にかけてナデ	内外面:2.5Y8/2 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-6	流路11	土師器	皿	(11.0)	(2.4)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ 体部外面に指頭圧痕が残る	内面:10YR8/2 灰白色 外面:7.5YR8/2 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-7	流路11	土師器	皿	(12.6)	(2.2)	—	体部内面から外面にかけてナデ	内面:7.5YR7/4 浅黄褐色 外面:7.5YR8/4 浅黄褐色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-8	流路11	瓦器	椀	(12.7)	(4.7)	—	内面はヘラミガキ、暗文有、口縁部内面に沈線が1条巡る 外面は口縁部はナデ	内面:N4/0 灰色 外面:N3/0 暗灰色	良	13世紀代
図13-9	流路11	瓦器	鍋	—	(4.0)	—	口縁部内面から外面にかけてナデ、体部内面は摩滅 体部外面は指押え	内面:N4/0 灰色 外面:2.5Y3/1 黒褐色	良	13世紀代
図13-10	溝1	土師器	皿	(7.2)	(1.4)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内外面:10YR8/3 浅黄褐色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-11	溝1	土師器	皿	(9.8)	(1.9)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内面:7.5YR8/4 浅黄褐色 外面:5YR7/6 褐色	良	14世紀後半～ 15世紀前半
図13-12	溝1	土師器	皿	(10.7)	(1.9)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内面:2.5Y8/1 灰白色 外面:10YR8/1 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-13	溝1	土師器	皿	(11.6)	(2.7)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内外面:10YR8/2 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-14	溝1	土師器	皿	(11.6)	(2.2)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内外面:10YR8/2 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-15	溝1	土師器	皿	(11.8)	(2.4)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ 体部外面に指頭圧痕が残る	内外面:10YR8/1 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-16	溝1	土師器	皿	(11.8)	(2.5)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ	内面:7.5YR8/3 浅黄褐色 外面:7.5YR8/4 浅黄褐色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-17	溝1	土師器	皿	(11.8)	(2.7)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ。	内面:7.5YR8/2 灰白色 外面:7.5YR8/3 朝黄褐色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-18	溝1	土師器	皿	(11.8)	(2.7)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ。	内面:7.5YR8/2 灰白色 外面:7.5YR8/3 朝黄褐色	良	14世紀後半～ 15世紀前半
図13-19	溝1	土師器	皿	(12.0)	(2.4)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ。	内面:2.5Y8/1 灰白色 外面:10YR8/1 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-20	溝1	土師器	皿	(12.6)	(2.5)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ。	内面:10YR8/2 灰白色 外面:10YR8/3 浅黄褐色	良	14世紀後半～ 15世紀前半
図13-21	溝1	土師器	皿	(12.8)	(2.8)	—	体部内面から口縁部外面にかけてナデ。	内面:10YR8/3 浅黄褐色 外面:7.5YR8/4 浅黄褐色	良	14世紀後半～ 15世紀前半
図13-22	溝1	須恵器	捏鉢	(29.0)	(4.1)	—	体部内面から外面にかけてナデ	内外:N7/1 灰白色 外面:N5/0 灰色	良	東播系
図13-23	溝1	緑釉陶器	椀	—	(2.1)	(5.8)	内外面に施釉 高台は蛇の目高台	釉:10GY2/1 緑黒色～ 7.5GY7/1 明緑灰色 素地:10Y7/1 灰白色	良	9世紀代
図13-24	溝1	焼締陶器	甕	—	(4.9)	—	体部内面から外面にかけてヨコナデ	内外面:5YR4/4 にぶい赤褐色	良	14世紀代 常滑焼
図13-25	溝1	焼締陶器	甕	—	(4.4)	—	口縁部内面から外面にかけてヨコナデ 頸部内面から口縁部外面に自然釉	内外面:2.5YR4/1 赤灰色	良	14世紀中 15世紀初 備前焼か
図13-26	溝1	灰釉陶器	椀	(12.7)	(2.8)	—	内外面施釉	釉:5Y7/2 灰白色～5Y7/4 浅黄色 素地:2.5Y8/3 浅黄色	良	瀬戸美濃系
図13-27	溝1	灰釉陶器	皿	—	(2.1)	(8.4)	底部内外面に施釉、外面には卸目	内面:2.5GY8/1 灰白色 外面:2.5GY7/1 明オリーブ灰色	良	瀬戸美濃系
図13-28	溝1	白磁	皿	(8.8)	(1.6)	(6.0)	内外面施釉 口禿	釉:7.5GY8/1 明緑灰色 素地:10Y8/1 灰白色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図13-29	溝1	白磁	椀	—	(1.4)	(5.1)	底部内面見込み部分の釉を環上に掻き取る	釉:5Y7/1 灰白色 素地:N8/0 灰白色	良	12世紀中～ 後半
図13-30	溝1	白磁	椀	—	(3.2)	(6.5)	内面は施釉、櫛目文 外面は高台境まで施釉	釉:2.5Y7/3 浅黄色 素地:2.5Y8/4 浅黄色	良	12世紀代
図13-31	溝1	青磁	椀	—	(1.9)	(4.8)	内面は施釉 外面は高台外側まで施釉	釉:5GY7/1 明オリーブ灰色 素地:10Y8/1 灰白色	良	14世紀代
図13-32	溝1	青磁	椀	—	(2.5)	—	内外面施釉	釉:7.5Y6/3 オリーブ黄色 素地:7.5Y7/1 灰白色	良	
図13-33	溝1	青磁	皿	(8.7)	(1.5)	—	内外面施釉	釉:2.5Y7/1 明オリーブ灰色 素地:5Y8/1 灰白色	良	12世紀代か
図14-34	溝1	瓦器	杯	(11.2)	(3.0)	—	内面はヘラミガキ、暗文有 口縁部外面はナデ	内外面:10YR6/1 褐灰色	良	13世紀後半～ 14世紀前半
図14-35	溝1	瓦質土器	羽釜	(20.0)	(6.3)	—	内面はヨコハケ 外面は口縁部から鈿にかけてナデ	内面:N4/0 灰色 外面:2.5Y6/1 黄灰色	良	



# 図 版







1 第一面目全景（北から）



2 第二面目全景（北から）



1 第三 面目全景(北から)



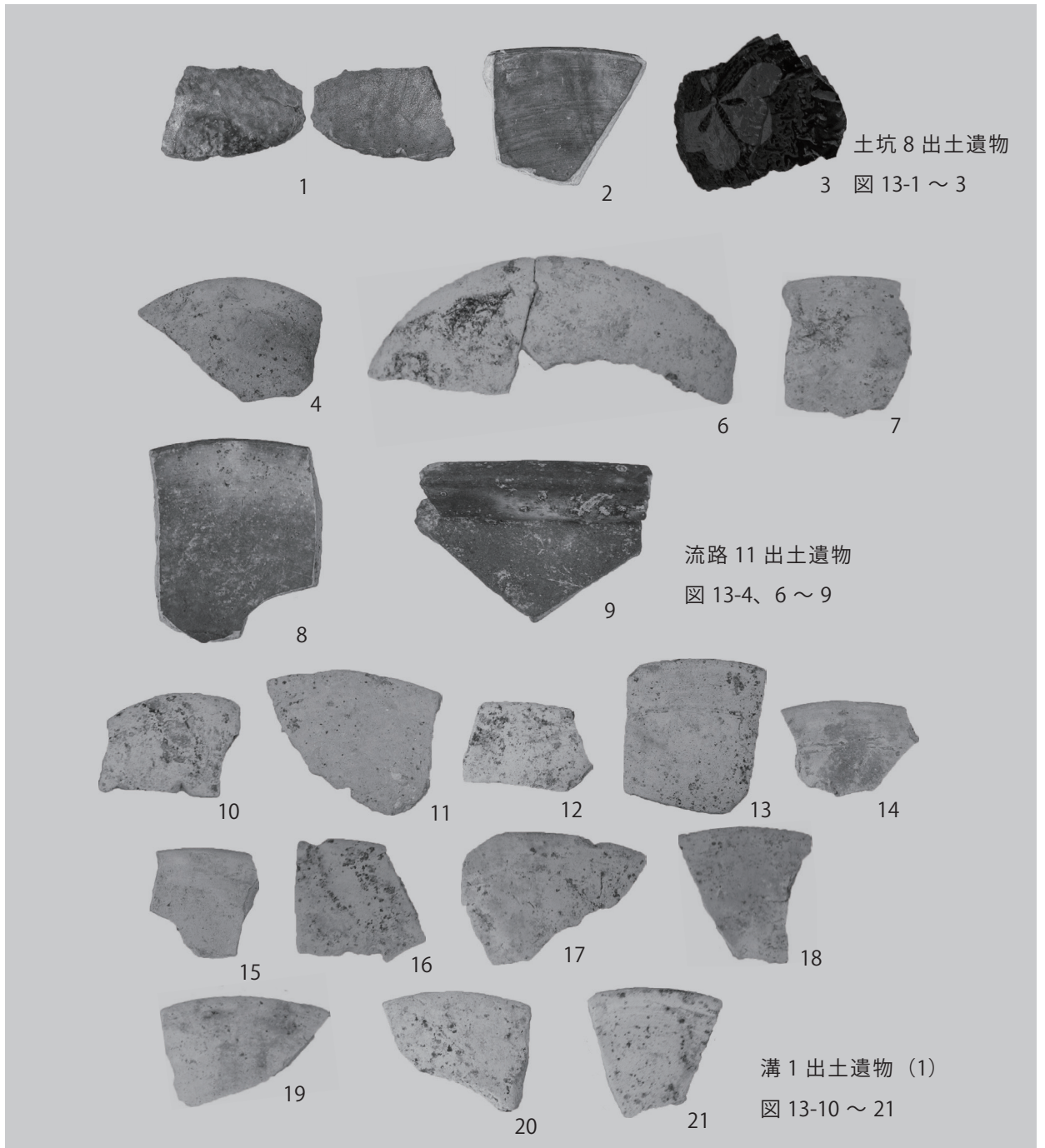
2 第三 面目遠景(北から)



流路 11 図 13-5



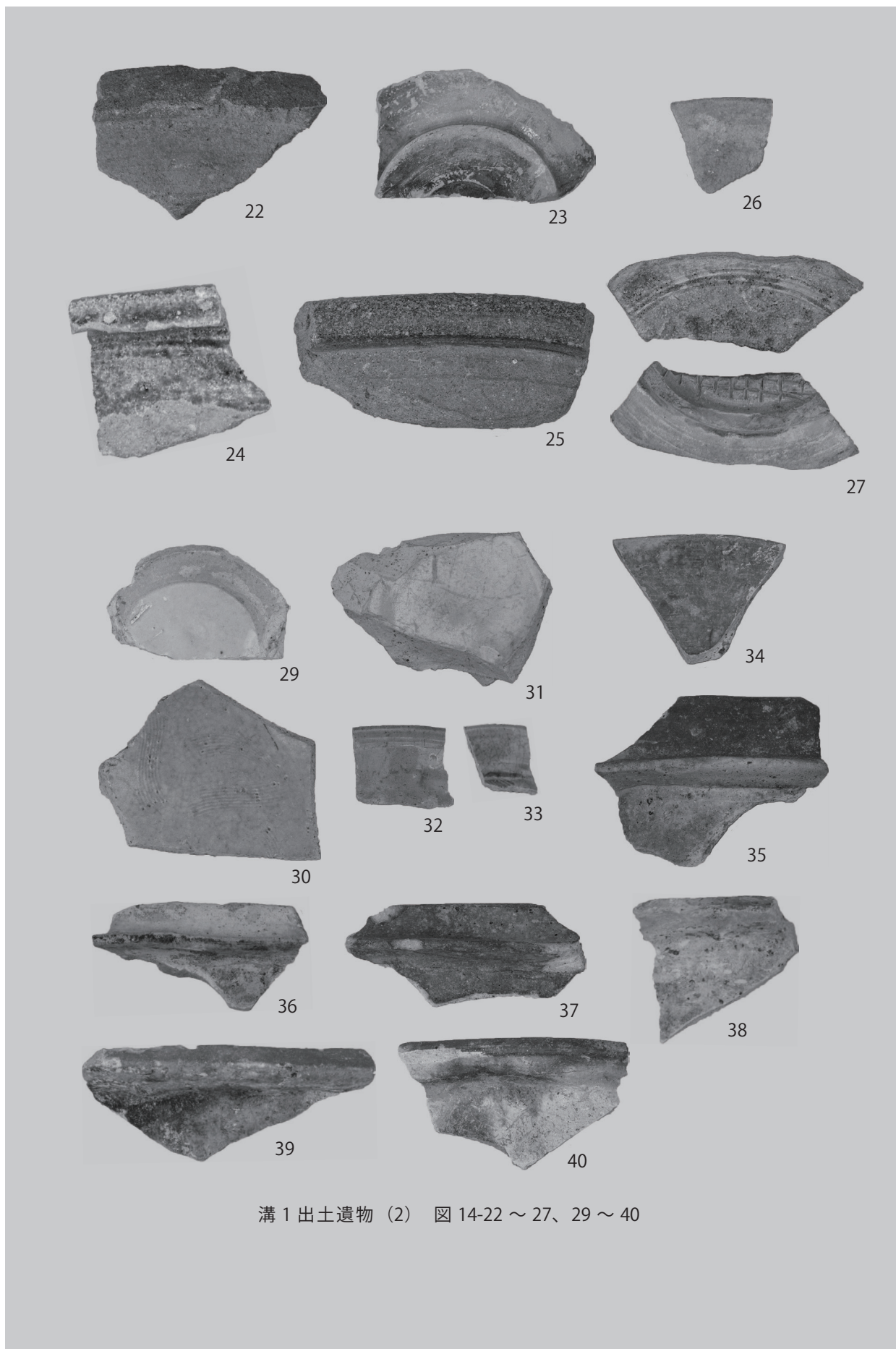
溝 1 図 13-28



土坑 8 出土遺物  
3 図 13-1 ~ 3

流路 11 出土遺物  
図 13-4、6 ~ 9

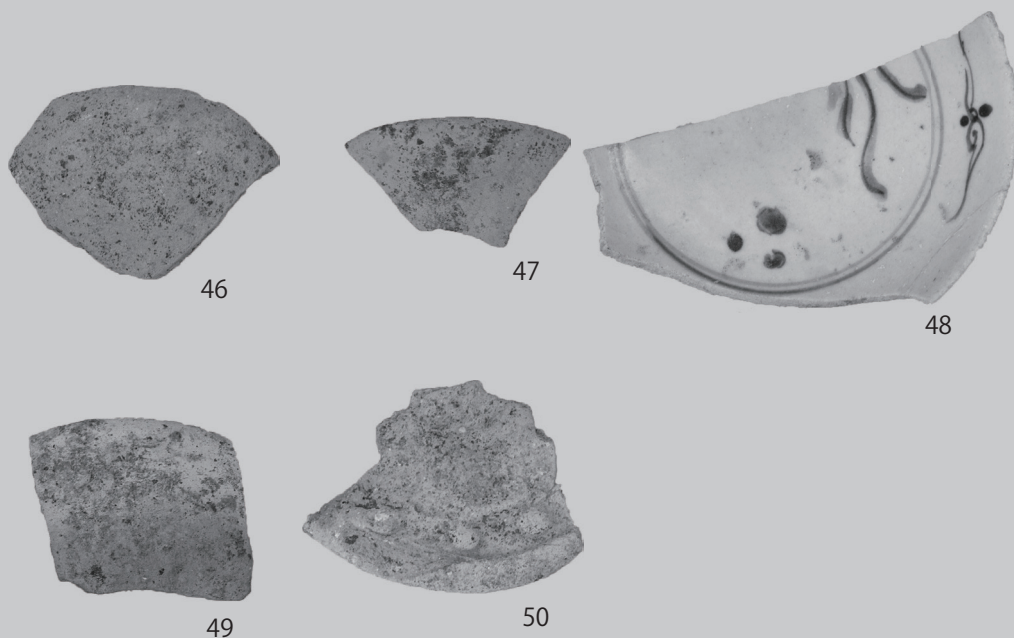
溝 1 出土遺物 (1)  
図 13-10 ~ 21



溝 1 出土遺物 (2) 圖 14-22 ~ 27、29 ~ 40



溝 1 出土遺物 (3) 圖 14-41 ~ 45



土坑 2 出土遺物 圖 15-46

土坑 3 出土遺物 圖 15-47、48

第一面目包含層出土遺物 圖 15-49、50



# 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうななじょういちぼうよんちょうあと・どうのくちちょういせきまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしよ
書名	平安京右京七条一坊四町跡・堂ノ口町遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	河野凡洋
編集機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行機関	国際文化財株式会社
所在地	〒660-0805 兵庫県尼崎市西長洲町1丁目1番15号
発行年月日	西暦2019(平成31)年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ななじょういちぼう 七条一坊 よんちょうあと 四町跡・ どうのくちちょうい 堂ノ口町遺 せき 跡	きょうとし 京都市 しもぎょうく 下京区 すじやくしやうかいちやう 朱雀正会町 1-30、 すじやく 朱雀 どうのくちちょう 堂ノ口町 20-4	26106	1・715	34° 59' 22"	135° 44' 31"	2018年 9月10日～ 2018年 9月27日	78.85	複合施設 新築工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京 七条一坊 四町跡・ 堂ノ口町遺跡	都城・ 散布地	鎌倉時代～室町時 代、江戸時代	流路、柱穴、溝、 土坑	土師器、須恵器、 緑釉陶器、輸入磁 器、瓦器、瓦質土 器、瓦類、木製品 石製品、金属製品 等	
要約	主に鎌倉時代から室町時代の南北方向の溝、流路を検出した。その他に土坑、柱穴を検出した。また、江戸時代の土坑を数基検出した。				



平安京右京七条一坊四町跡・  
堂ノ口町遺跡  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2019 (平成 31) 年 3 月 25 日

編集・発行 / 国際文化財株式会社

〒 660-0805 尼崎市西長洲町 1 丁目 1 番 15 号

TEL : 06-4868-5980 FAX : 06-4868-5981

印刷 / 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

TEL : 075-256-0961